

5月26日(土) 16:55~17:35 (第二分科会:筑紫女学園大学スクワーヴァティーホール

---

〈富士越龍図〉再考  
—聖徳太子伝承における「天翔ける黒駒」との関係—

学習院女子大学 大塚 純子  
OTSUKA Junko

---

近年、民俗学の分野から龍や龍図像を見直す、重要な2つの文献が出版された。笛間良彦著『図説龍の歴史大事典』(遊子館、2006年)、および、9名の研究者による比較文化論的論集、安田喜憲編『龍の文明史』(八坂書房、2006年)である。両書によって龍の起源や伝承、また現在におよぶ龍信仰などが広汎に纏められたが、なぜか日本の龍図像の全貌に関しては大掴みに紹介されたに過ぎず、美術史的にみると抜け落ちている図像が多数ある。これを踏まえ本発表では、日本美術史において、近世期以降重要な絵画主題となっている、富士山と龍を組み合わせて画面に配した、一般的に〈富士越龍図〉と称する図像を取り上げ、従来提出してきた解釈に対し、新たな解釈の可能性を提示しようとするものである。

そもそも龍図像は、日本において古くからパターン化された図像として継承してきた。しかし富士越龍図は、「雲龍図」「龍虎図」など、龍図像が盛んに描かれていた中世期に遡る作例は確認されておらず、しかも、日本に多大な影響を与えた中国においても、特定の山と龍を組み合わせた図像は現在のところ確認できない。美術史上これまで富士越龍図は、狩野探幽筆「富士に龍図」(大阪・慶瑞寺蔵)に代表される様に、近世期に登場した新しい龍図像とされ、以降現代まで絵画化されてきている。

かつて山下善也氏は、〈富士越龍図〉が探幽と交流のあった江戸期の漢詩人・石川丈山、あるいは藤醒梅によって「富士山に神龍が棲む」と詠われたことを挙げ、文学者が富士山という神秘性をそこに棲む龍に準えイメージしたように、探幽も同様のイメージを絵画化したものと述べている。しかし、他の多くの富士越龍図も暗に物語っているように、「富士山に龍が棲む」イメージを、厳密にその画面から解釈するのは難しい。むしろ、丈山の漢詩を直接的に象徴するのは、例えば長澤蘆雪筆「富士越鶴図」(個人蔵)などではないだろうか。以上のことから、山下氏の解釈に疑問を感じた発表者は、別に拠り所となった図像があるのでないかと考え、再考察を試みた。

その過程で見えてきたのは、〈富士越龍図〉を〈富士図〉として見ていくと、中世期以来の「聖徳太子絵伝」の必須モチーフである「聖徳太子が黒駒に乗り、富士山を越える」図像(仮に〈黒駒太子図像〉と称する)との類似点に気づく。これは、数ある聖徳太子伝承の太子27歳の項を絵画化したものである。伝承によれば、この黒駒はただの甲斐国(甲斐)の黒駒ではなく、「龍」の血を受け継ぎ、靈力を持つ神馬として描写されている。また、古代中国以来の言説において、馬と龍は一心同体を成すほど密接で、しばしば馬は龍に置き換えられることがあった。江戸期に描かれた富士越龍図の多くは、出世や不老長寿の吉祥図像と見なされるが、その背景には、黒駒太子伝承に内包される神秘性と吉兆性が、〈富士越龍図〉として近世期に再創出された可能性が窺われる所以である。